

- * 4 奉公人 米沢藩では、城下に収まりきれなかった家臣団を、城下郊外の東原、南原に住まわせ、下級家臣団の侍町を作った。ここに住む下級家臣団は、原方衆、原々奉公人などと呼ばれた。
- * 5 所御仕置 現地での見せしめの処罰。
- * 6 はた物 処刑された死骸のことか。
- * 7 御横目 監視・監察などの役職。
- * 8 名跡 苗字の跡目を受け継ぐこと。

八 李山村の多蔵、狐にばかされること

東李山村銭子屋敷というところに、多蔵という者がいた。もともと気丈な者で、酒をよく飲み、働きも人に勝って力田の者（田畑の耕作に力をそそぐ者）で、暮らし向きもよく、よい百姓である。

東山上村の戸板に伯母がいるが、盆前より具合がよくないので、見舞いをしたいと思っているのだが、田畑の仕事に追われて、今日の明日のとうちうちに盆になってしまったが、そのうち全快したという伝言もあったので、盆の行事もすませて、二十三日に伯母

のところへ出かけた。

伯母は久々の面談なので喜んで、酒よ冷麦よと、もてなしてくれた。盆前に隣の家の従弟に子どもが生まれ、今日は日明き（お産の忌明け）の祝い事の日で幸いなのでと、従弟が来て、是非にと招かれ、断ることもできずに行った。もともと酒好きなのでゆっくりして、日暮れになったので、多蔵が「帰ろう」と言うと、伯母は「久しぶりなので夕飯を」と言っけて引きとどめた。多蔵は、盆過ぎは忙しいこともなく、珍しく従弟たちも来たので、ゆっくりとした。

多蔵が帰ろうとすると、伯母が言うには、

「今夜はもう四ツ過ぎ（午後十時ごろ）にもなったでしょう。和泉屋敷あたりには悪い狐がいて、春に片子の五郎兵衛殿がばかされ、この盆前にも裏町の権六殿が振舞い帰りにばかされて、土産の食籠（食べ物が入った入れ物）を取られて、一つは堰の堀端に、もう一つは和泉屋敷の土手下にあったということです。夜中の帰りは絶対にいけません。泊まって明朝帰りなさい」

と。多蔵は、

「それは人によるだろう。この多蔵などをばかす狐は、生き皮剥いでやろう」

と言う。来ていた従弟たちも伯母と同じように止めたが、いっさい聞き入れない。

「それならば、送りましょう」と従弟たちが言うのと、多蔵は、

「これまで夜中にも往来してきたけれども、狐はもちろん鼠子ねずこにも出逢ったことはない。送ってもらうには及びません」

と言って聞き入れない。

家の者は仕方なく、それ土産だ、苞つと（藁わらに包んだもの）だ、隣からの祝いの赤飯だ、煮物だと、重箱包みに二苞を取りそろえた。重箱は腰に付け、苞二つは手にさげて、出立したのは、かれこれ九ツ過ぎ（午前零時ごろ）でもあつたらう。

多蔵は、機嫌にまかせて小唄をうたい、月はさし上つて夜はよく、踊り戻りの笛*1の音が遠く聞こえて心楽しく、松原獄門場まつはらごくもんばあたりと思われるほどまで来たところ、傍らかたわの木立こだちの陰から、二十ばかりのとても艶なまめかしい女が一人、ひらひらと出て来て、

「おじ様、どこまでお出で」

と言う。多蔵は、

「おれは李山まで。そなたは」

と言うと、

「私は片子の実家へ盆礼にまいりましたが、夕方になったので、泊まっていくように強く

引き止められましたが、今朝、かか様（姑）に、泊まらずに帰れと言われたので、それで急いだのですが、暮れになってしまいました。松原には悪い狐がいて、ときどき人々がばかされ、すでに盆前にも、裏町の権六様がばかされて、お振舞いのおみや、ころころ取られたという話。私も母が寄こしたかか様への土産を一包み持っているのです、何となく薄気味わるくて、だれか通つたならば、ご一緒したく、この木陰で待っていましたところ、すつかりまっ暗闇になってしまい、しかたなくここに出てきました。ご面倒でしょうが、漆原うるしはらまでお連れください」と、しおしおとして話した。

多蔵心に思うには、「きやつ（こいつ）、さてこそ狐め、見損なっているんだな、よし」と。

「しっかりと送ってあげましょう」

と言って先に立つと、女、

「お手ふさがりでしょう、その包み、私がお持ちしましょう、お寄こしてください」

と言って手を出したので、多蔵、さてこそと思ひ、わざと苞をさし出して、

「このうまい土産、人に渡されるものではない。それよりこの傘を持ってください」と言えば、

「たしかにお持ちしますが、二包みはお持ちにくいでしょう。ぜひ一包みはこちらへ」と言う。多蔵は、

「これなど、人手に渡すことはできない」と言つて、

「これか、これか」

と女の鼻先へ二三度さし出すと、女はホホホと打ち笑つて、

「そのお腰に付けられた包みをお寄こしくくださいな」

と言う。多蔵、

「いやいや、これはお赤飯で、なおだめだ」

と言つているうちに、やがて街道へ出た。

女が、

「あの火の見えるところが私の家。ご苦労ですが、もう少し」

と言えば、多蔵、

「十分に送つてあげよう」

と言つて、もしもこの苞などに手をかけたならば、ひとつかみにしてくれようと、女の後について行くと、間近くなって、

「かか様、かか様」と言う。

すると、姑かか、走り出てきて、

「この暗いのに、どのようにして」

と。女は、

「それは、暮れになって仕方なく、小坂の下で人通りを待っていたら、このおじ様がお通りになったので、ここまで送られてきました」

と言う。姑かか、

「やれやれやれ、まずはこちらへ」

と、姑と嫁としなだれかけて手を取つて引きとどめる。

多蔵は面白くなり、内をのぞいてみると、焚火たきびが賑々にぎにぎしくて相応な住み家にみえた。しかしながら、油断はならないと、腰に付けた重箱をさぐってみると、変わりはない。

嫁と姑はあちこち動き回つて団子をこしらえ、

「お茶を一つ」

とさし出す。

多蔵は心に、「馬の小便に馬糞ばふんの団子は、むかしからの狐の定法じようほう、今どき古い古い」と、

おかしかった。

「伯母のところまで満腹」

と言えば、

「それならば、お家へのお土産に」

と包んで出して、

「まずはお風呂へお入りください。おかん（嫁の名）、汗を流しておあげなさい」と言う。

多蔵は心に、「泥田の風呂、これも狐の定法、古い古い」と思って、

「まずまず、かか、お入りなさい」

と言えば、かか、

「それでは、私、湯加減を」

と湯に入る。

「おかん、おかん、火を焚いて」

と言うので、多蔵が、

「私が焚いて上げよう」

と、傍らにあったたばこ殻がら、豆殻まめがらなどをやたらに焚くと、かか、湯から上がって、

「おかん、おかん、汗流して」

と言うので、多蔵は、

「私が流して上げよう」

と言って近寄ると、かか、

「ご過分ながら（ありがたく）」

としなだれて背中を向けたので、湯巾ゆきん（手ぬぐい）を押し取って、背中うしろの皮もむけよと押しこすった。

かかはたまりかねて、

「もうし、もうし、止めにしして」

と言うが、多蔵、

「なにが止めにししてだ、生皮はがしてくれよう」

と、片手では肩をつかまえて動かさせないで、そばにあった縄でもって、皮もむけよと押しこすれば、背中から血が流れ、かか、こらえきれずに声を上げて、

「もうし、もうし」

と叫んだが、

「どうだ、どうだ」

と聞き入れず、少しも動かさなかった。

その時、

「多蔵、多蔵、多蔵ではないか」

と言って、従弟二人が来て、

「何をしている、ここで」

と言うと、多蔵、

「今、狐の生き皮はぐところだ。これを見ろ」

と言うので、近寄って見れば、石地藏をつかまえて、背中を押しこすっている。血に染まっているのは、自分の手が破れて出ていた血だった。

従弟たちに口をそろえて、

「伯母御が、心許ないと心配されたので、我らが二人で来てみると案の定だ。まます戻りなさい」

と言われたので、多蔵は呆氣にとられてあきれ果て、ようやく気が付いた。

狐の家と見えたのは、盆の墓の作り、畳と見えたのは、墓参りするときに供物をのせるガツギ（真菰）の莛、姑かかと思って押したのは、石地藏だった。いっしよに来た嫁もないし、火棚にかけておいた苞もない。傘ばかりが変わりなくあった。

それから、従弟たちといっしよに伯母のところへ戻った。土産にともらった包みを袂から取り出してみれば、しおれた芋の葉に包んだものだった。開けてみれば、馬糞である。しかし、重箱は腰からはなさなかつたので、これはどんなかと開けてみると、これはどうしたことか、いつの間に入れ替えたのだろう、赤飯ではなくてやわらかい馬糞だった。さすがの多蔵もあきれはてて、それ以来、多蔵はこの道を恐れて通らなかつた。たまに伯母のところへ行くときは、行き帰りとも回り道をして、二度とこの道は通らなかつたということである。

これは、天明（一七八一〜一七八九）の末年ころのことだという。同じ銭子屋敷の浅之助の話なので、嘘ではなく、本当のことである。さすがの多蔵も、初めから狐と違っていつばかされたというのは、怪異なことである。むかしから狐にばかされる者は、柔弱の者、または愚鈍な者、大臆病者がばかされるといだが、怪異なこともあればあるものである。

*1 踊り戻りの笛の音 踊り終わって戻ってくるときも鳴っている笛の音か。不明。

*2 火棚ひだな 炉の上に天井からつるした棚。

「参考」この話は、「馬の糞団子」「風呂は肥溜め」として広く知られている型の世間話である。

九 吉田一無いちむ、壮年の時大井田伊兵衛と居合稽古いあひげいこのこと

吉田一無*1は、壮年の時は次左衛門という名で、年をとって隠居して一無と号した。若い時より梅沢運平*2に入門して一刀流居合と手詰棒てづめぼうの稽古をしていたが、熱心さは同じ門弟たちの倍以上で、その技はまた人より飛び抜けていて、格別に上達したということである。定例の三と八の稽古日のほかに、間の日にも幾度となく通った。

同じ門弟の大井田伊兵衛「当代の平右衛門の祖父か」、これまた格別に熱心な者で、とりわけ仲のよい友達だった。大井田は、以前から強気で、吉田同様に熱心で、その技も人より抜きん出ていたという。芸は、持ち前少し鈍いほうで、吉田と十度戦うと、六度は吉田の勝利ということであった。それでも、気が強いので、組打ちでしっかり組み伏せられても、はね返して、仮にも負けるということをしなかった。

ある時、師匠の家で、伊兵衛が一無に言うのには、

「今日は、家の婦女子どもが振舞いに行っていて、自分一人だ。これからいっしょに家へ立ち寄れ」

と言う。「それならば」と、同道して大井田の家へ行った。

伊兵衛は、

「とにかく、人が来れば時間ももつたいないので、戸を閉めよう」

と言って、戸を閉め、一無と二人だけになって、打ち合い、突き合い、組んずほぐれつ、たがいに心のままに動いた。

そして、勢いも尽きて、くたびれたので、「まず今日はこれまでにして、明日やろう」ということになり、日没ごろ一無は帰った。

さて、暮れ方に帰宅した一無が夜食に向ったところ、女房が一無を見て、

「よくも打たれて来やったな(来ましたね)」

と言う。一無が、

「何を」

と言うと、

「頭から血が流れていますよ」